

# 人麻呂の挽歌と哀傷詩文

辰 巳 正 明

## 一 序

万葉集は人の死を悲しむ歌々について、それらを「挽歌」という部立を以って分類したのであるが、この「挽歌」の語は中国でいう「挽歌」の意とは必ずしも重なるものではない。卷二挽歌の左注に見える「右件詠等、雖不挽柩之時所作、准擬歌意。故以載于挽歌類焉。」（二四五左注）というのは、「挽歌」が本来「挽柩之時」に歌うべき歌であることを自明とする知識が、それ以外の歌であるという区別を提示しつつ、なおそれを挽歌の範疇に包み込んだことを断つたのである。「挽歌」が本来的には柩を挽く（輓）折に歌われる悲しみの歌であるならば、万葉集にはそうした原義の意味での挽歌は存在しない。契沖が挽歌を「後ノ集ノ哀傷ナリ」（『万葉代匠記』）

というごとく、万葉集の挽歌は「哀傷」に含まれるべき歌であろう。『古今集』以降に「哀傷」の部立が登場し、人の死を歎く歌を含めるのは、『文選』などの「哀傷」の概念に沿うものである。ただ、中国にも人の死を歎く「挽歌」が「挽柩」から離れて存在するから、挽歌の用語上の問題は残るが、『文選』や『芸文類聚』の分類規範や、『文心雕龍』の表現論から説く分類などに基づけば、人の死を悲しむ文学表現は「哀」「哀傷」にあると言えるよう。

人麻呂の挽歌も、およそ「哀傷」の概念で考えられるべきものであろう。「殯宮」の折の作などには中西進氏の指摘があるように、明らかに「誄」の表現に支えられた表現を確かめ得るものもあり、人麻呂は中国文学によって挽歌の表現を整え、新たな文学表現を形成して行っ

たことを窺わせる。

挽歌が中国の詩文に支えられ、新たな文学表現として形成し得たのは人麻呂に於いてであろう。それは漢文学の知識を語彙的に享受するのではなく、人の死を悲しむ歌の表現に対し、それを「哀傷」という表現法に因って詠まれるべく、謂わば主題論として取り込まれていることによる新たな文学表現である。人麻呂のそのような表現による作は「泣血哀慟歌」(巻一・二〇七—二一六)に見えており、ここには潘岳の哀傷詩文、殊に「寡婦賦」との関係が考えられ、妻の死を悼むことを主題とする新たな文学表現を認めることができる。

ここでは「哀傷」に視点を据えて以下三首の人麻呂挽歌を、中国詩文の「哀傷」の表現について、主に『芸文類聚』所引の詩文から考えてみたい。

## 二 潘岳「悼亡賦」と吉備津采女挽歌

### (1) 薤露行

人麻呂の吉備津采女挽歌は次のように詠まれている。

吉備の津の采女の死りし時、柿本朝臣人麿の作る

歌一首并短歌

A 秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは  
B いかさまに 思ひをれか 栲縄の 長き命を

C 露こそば 朝に置きて 夕は消ゆと言へ 霧こそば  
夕に立ちて 朝は失すと言へ

D 梓弓 音聞くわれも おぼに見し 事悔しきを

E 敷栲の 手枕まきて 劔刀 身に副へ寝けむ 若

草の その夫の子は さぶしみか 思ひて寝らむ

悔しみか 思ひ恋ふらむ

F 時ならず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと(巻二・二二七)

### 短歌二首

楽浪の志賀津の子らが罷道の川瀬の道を見ればさぶしも(二二八)

天数ふ大津の子が逢ひし日におぼに見しかば今ぞ悔しき(二二九 日本古典文学大系、以下効之)

この長歌の特徴は、露や霧のはかなく消え失せるところから、采女の死の比喩として「露」や「霜」(及び「露霜」)、あるいは「霧」などが多く詠まれているが、その中でも短い命の象徴へと転用される。露や霜あるいは霧が消え易い生命の象徴として比喩化されるのは人麻呂の作が早い段階のものであり、露や霜や霧がなぜ人麻呂に因って短き命の象徴や比喩とされたのかは、注意すべき問題であるように思われる。

こうした露や霧などが人麻呂の挽歌に現われることの意味は、単に自然現象として捉えずに死の象徴としたことの意味に視点を向けて考えて見るべきであろう。ここに直ちに思い起こされるものとして、中国の挽歌である「薤露」の歌がある。

薤上露何易晞 露晞明朝更復落 人死一去何時帰

〔樂府詩集〕第二十七

薤上（にらの上）に降りた露がたちまちに晞くことを歎きつつも、露は晞いて明朝また降りるが、人が死んで一度去ったらもう二度と帰らない、と歌うこの著名な「薤露」の歌は、まさに「露」を人の命の象徴として詠んでいる。この「薤露」は「蒿里」の歌と共に、中国では死者の柩を挽く折に歌われた挽歌であった。この二つの挽歌の成立について、崔豹の『古今注』などは次のように説明する。

崔豹古今注曰。薤露蒿里並喪歌也。本出田横門人。

横自殺。門人傷之為作悲歌。言人命奄忽如薤上之露易晞滅也。亦謂。人死魂魄歸於蒿里。至漢武帝時李延年分為二曲。薤露送王公貴人。蒿里送士大夫庶人。使挽柩者歌之。亦謂之挽歌。譙周法訓曰。挽歌者漢高帝召田横至戶郷自殺。從者不敢哭而不勝哀。

故為挽歌以寄哀音。樂府解題曰。左伝曰。齊將与呉

戰於艾陵。公孫夏命其徒歌虞殯。杜預云。送死薤露歌即喪歌。不自田横始也。按蒿里山名。在泰山南。魏武帝薤露行曰。惟漢二十二世所任。誠不良。曹植又作惟漢行。〔樂府詩集〕卷二十七

「薤露」「蒿里」の二曲の挽歌は、田横が自殺した折にその門人が傷み悲歌を作ったことに始まり、漢の武帝の時に李延年在二曲に分け、「薤露」を王公貴人の、「蒿里」を士大夫庶人の柩を挽く折の歌としたというのである。その後、樂府体の「薤露」を模した魏武帝の「薤露行」や、それを受けた曹植の「惟漢行」があるという。

「露」をはかないものと見て、人の命に比喻する方法はこの「薤上露」に現われる如く、漢代以前からあったものと思われる。それが田横の物語の中で右のように出来上ったのである<sup>(2)</sup>。これが普遍化することで、「言人命奄忽如薤上之露易晞滅也」と言い伝えられ、後にも同じく樂府体の曹操（魏武帝）の「短歌行」に「对酒当歌。人生幾何。譬如朝露。去日苦多。」（『文選』卷二十七）とも詠まれ、明らかに「薤露」から発想されたものである。「薤露」も「蒿里」も、挽歌として著名であった許りではなく、それが樂府として広く歌われ、後代にも同じ樂府体で「薤露行」（魏武帝・曹植・張駿）「惟漢行」（曹植・伝玄）「蒿里行」（魏武帝・鮑照・僧貫休）が新作され、挽歌

の最も基本となる原歌としての意味をもっていたのである。

このような中国の挽歌の意味を万葉集の編者は理解していた筈である。先述の「雖不挽柩之時所作」という左注の記し方は、明らかに『古今注』が説明する「使挽柩者歌之」といった知識が前提となっていることを示すものである。人の死を悲しむ歌として直ちに中国の「薤露」「蒿里」を想起させたであろうと思われる、人生の短命であることを露に寄せて歎く詩は「古詩十九首」にも「年命如朝露」(第十三首)といい、薤上の露の系譜にあるものであろう。<sup>(3)</sup>万葉集では天平十一年に亡妻悲傷の歌を詠んだ家持の作に、「露霜の消ぬるがごとくあしひきの山道を指して入日なす隠りにしかば」(巻三・四六六)とある「露霜」の如く消えた妹の姿は、薤上の露が朝に晞滅することで人の死を比喻するのに等しい。家持のこの亡妻悲傷歌は、人麻呂の泣血哀慟歌を継承しているものであることは明らかである。家持の挽歌に先立って、人麻呂の吉備津采女挽歌に、

露こそば 朝に置きて 夕は消ゆと言へ

霧こそば 夕に立ちて 朝は失すと言へ

朝露のごと 夕霧のごと

のように繰り返し詠む、全体に比重の大きいこの表現

は、奈良朝以前に人麻呂が中国挽歌の「薤露」に歌う「薤上露何易晞」を前提として詠んだであろうことを推定するのである。

挽歌詩人とも呼び得る人麻呂が、中国挽歌の表現に支えられて新たな挽歌を形成して行ったことは十分に考えられる。吉備津采女挽歌は、人麻呂が中国の挽歌「薤露」を前提として詠んだ、和歌による「薤露行」であったと想定することは可能であろう。

## (2) 「悼亡賦」と吉備津采女挽歌

もちろん、吉備津采女挽歌は「薤露」に因つてのみ新たな表現を形成して行った訳ではない。さらにいくつかの中国哀傷詩を背景としているように思われる。その中でも、殊に普の潘岳(安仁)の「悼亡賦」は、吉備津采女挽歌の構成に大きな役割を果していると思われる。潘岳の作には多くの哀傷詩文があつて、人麻呂の泣血哀慟歌も潘岳の「悼亡詩」「哀永逝文」からの影響が認められることは早くから指摘されて来た。<sup>(4)</sup>

ここでは、潘岳が妻の死を悲しみ詠んだ「悼亡賦」(『芸文類聚』哀傷)に焦点を当て、他の哀傷詩文も考慮して考えて行きたい。

## A段へ妹の容姿

冒頭の四句は、まず死んだ采女の容姿をのべるところ

からはじめる。「秋山のしたへる妹」とは、秋山の紅葉を妹に比喻したもので「秋山のみみぢのやうな紅顔の妹」（沢瀉『注釈』）の意であろう。秋山のみみぢの美しさを妹の形容に比喻した歌は万葉集には見られない。ただ、黄葉の散る如く死んだ妻と、その妻を求めて秋山の黄葉の中をさ迷う男の姿を詠んだ挽歌を見るが、これも人麻呂の泣血哀慟歌（巻二・二〇七―二〇九）に於いてである。秋のみみぢを妹の比喻とし得るのは、若い女性の顔を形容する漢語「紅顔」が背後にあるからであろう。憶良は「紅顔共三従長逝」（悼亡詩序）と記しているが、もみぢと妹との結び付きは、このような漢語から来しているものと言えよう。次の「なよ竹のとをよる子ら」は、竹がしなやかに撓む如く靡き寄る妹の意で、やはり妹の形容であるが、後に石田王の死んだ折の丹生王の歌にも「なゆ竹のとをよる皇子」（巻三・四一〇）とも詠まれる如く、これは身体やしなやかさや若々しさを述べたものである。なよなよとした若々しい竹の如きしなやかな妹であるということ、この妹を讃めているのである。

A段は、まず美しい采女の容姿を讃めるところから描写するのであるが、このような手法は後に述べる泊瀬部皇女献呈挽歌や、明日香皇女殯宮挽歌に皇女の姿を「玉藻」のイメージの中で捉えるのと等しい。このように、

妹の形容からはじめる采女挽歌に対し、「悼亡賦」は、妹の形容からはじめる伊良殯之初降。幾二紀以迄茲。

A' 伊良殯之初降。幾二紀以迄茲。  
とはじめる。ここでは、妻が初めて嫁した折の、妻を讃めるところから説き起す。「殯」は妻であり、その妻を「良殯」というのは、りっぱな妻、美しい妻の意である。潘岳は他でも死んだ女性の形容を「窈窕淑良、如彼春蘭、吐葩含芳」（京陵女公子王氏哀辞）と言う。「窈窕」は女性のしとやかで上品なこと、その上品さは春の蘭の如く華麗で良い芳りを含んでいると述べている。「良殯」とは、そのような内容を含んでいることばだと見てよいであろう。

#### B段△死の提示▽

B段は妹の死の提示部分である。采女はどのように思ったのか、本来長くあるべき命を短命で終るとは、という意である。人麻呂は突然の死の訪れを日並皇子挽歌でも「いかさまに思ほしめせか」（巻一・一六七）と詠み、また、天智天皇の近江遷都を「いかさまに思ほしめせか」（巻一・二九）と言う。推し測り難い不幸の状況を、人麻呂は右のように問うのである。ここでは、美しくあった妹の突然の死をこのように表現したのであるが、「悼亡賦」は、

B' 遭両門之不造。備荼毒而嘗之。嬰生難之至極。又

薄命而早終。

と続ける。妻の死によって両家の「不造」（不幸）に遭い、生苦の極限に触れ、そして妻は短命にして世を去ったという。B段は不幸の起ったことを提示し、その死を歎く段落であり、死の提示部であると言えよう。

C段入露の命V

この段は、先述の如く「薤露」の歌を背景とした、露の如き命を述べたものと言える。人麻呂はそれを露のみでなく霧をも対象として、露と霧をも漢文学的な対句の手法で表現したのである。このはかない命について、「悼亡賦」では、

C'含芬華之芳列。翩零落而從風。神飄忽而不反。形

焉得而久安

と詠む。ここでは「露」や「霧」は詠まれていないが、美しい花が良い香りを放っていても、花びらがはらはらと散れば風に従うごとく、神飄（はやて）も突然吹いて反らないごとく、形を何時までも留め置くことはできないのだと言っているのである。対象の素材は異なりながらも、いずれも人の命に比喻し得る素材である。花が短い人生の比喻とされるのは指摘するまでもないが、後者については「古詩十九首」に「人生寄一世，奄忽若飄塵」（第四首）という。「飄塵」は旋風に吹かれる塵で、旋風に

吹かれて消えた塵を人の世のはかなさに喩える。

こうした人の命のはかなさを自然の景物に寄せて詠むのは珍しいものではない。同じ哀傷詩文の中では、魏の陳王曹植の「行女哀辭」に「方朝華而晚敷，比晨露先晞」とあり、朝の花と共にあった女兒が夕方に花と共に散り、朝の露よりも先にはかない命を終えたという。あるいは、晋の陸機の「呉大司馬六公少女哀辭」では「萼々晞陽，不遂其茂，曄々芳華，凋芳落秀」と詠み、露は日が昇って次第に晞えて茂ることなく、かがやく芳華は芳りを失い花を散らすという。いずれも露や花に寄せて人の命のはかなさを述べたものであり、哀傷詩文の特徴である。

D段入ほのかな妹V

ここの「吾」は作者自身である。采女の生前に、采女の評判を聞きながらもほのかに（髣髴）しか見ることが無かったのを悔やむのだという。人麻呂のこの立場とは異にするが、「悼亡賦」は、

D'表沿華於餘顏。問筮嬪之何期。宵過分而參闈。詎

幾時而見之。目眷恋以相屬。

と詠む。化粧をした妻の顔がほんのりと表われ、妻の死が信じ難く占を以って妻の来るのを問うのだが、夕方を過ぎて来ることがなく、妻への思慕に耐えられず目を

凝らして見つめるのだという。立場は異なり、また生前と死後との違いを見るが、妹や妻を見ることが共通の話題とされ、その見る対象がはっきりと現われて来ないことを詠むのがこのD段である。

E段へ夫の思い▽

このE段は、作者が死んだ采女の夫の思いを推し測ったところである。若草の妹と手枕を交して共寝をしたであるうその夫は、妹が死んで淋しく思って寝ているだろう、悔やしく思って恋い慕っているだろう、と推測する。この夫の思いを「悼亡賦」は次のように詠む。

E' 入室兮望靈座。帷飄々兮燈燐々。燈燐々兮如故。帷飄々兮若存。

夫は妻と共に過ごした部屋に入るが、そこは主のいな  
い荒れた部屋(空室)である。その空室に設けられた祭壇  
を眺めると、部屋のとぼり(帷)は風に揺れ、燈りは光  
り輝やき妻の生前そのままであり、妻が生きているよう  
だと言う。人麻呂は夫が妻を思う姿を「さぶしみか思ひ  
て寝らむ悔しみか思ひ恋ふらむ」と、繰り返しの技法を  
用いて表現しているが、これが「悼亡賦」の「帷飄々兮  
燈燐々、燈燐々兮如故、帷飄々兮若存」の繰り返しの表  
現と近いことは注意して良いであろう。

F段へはかない妹の命▽

「時ならず」は、まだ死ぬような時(年)ではないの  
意。思いもよらぬ采女の死が夭折を指すのか、自殺を指  
すのか明らかではないが、おそらく、まだ若い女性であ  
ったことに對する哀惜の表現であろう。その妹のはかな  
い命を先に述べた「朝露」「夕霧」をここでも繰り返して、  
「薶露」を示唆しているのであろう。「悼亡賦」は空室が  
妻の生前のままであることを続けて、

F' 物未改兮人已化。(中略)春風兮泮冰。初陽兮戒温。  
逝遙遙兮浸遠。嗟燐燐兮孤魂。

と詠んで一編を終える。周囲の様子は妻の生きている時  
と全く同じでありながら、妻はすでに死んでしまったと  
いう。まさに「時ならず過ぎにし子ら」の姿であり、采  
女の夫も妻と共に過ごした時の短かく、また周囲の姿も  
変わらずあるのに妹だけが露や霧の如くはかなく消え去  
ったことに淋しく悔やしい思いでいるのだろう。春の風が  
吹きはじめて氷を解かし、春の日は温かさを告げるが、  
逝った者ははるか遠く、自分はひとり孤独であるとい  
う。死に去った妻も季節の移り変りに従って次第にはる  
かになり遠くに感じられるようになって、改めて残され  
た自分が一人ぼっちであることを強く感じたと言っただ  
ろう。妹が朝露や夕霧と共にはかなく消え去ったことへ  
の歎きは、妹がはるかな時間の彼方へと去って行ったこ

とを示唆する表現のように思われ、「逝遙遙兮浸遠」は過ぎにし子が朝露の如く夕霧の如くはかなく消え、人はるか遠くへと去ったVの意を十分に含みもっているように思われる。

### 三 魏丁眞妻「寡婦賦」と泊瀬部皇女献呈挽歌

朱鳥五年九月に天智天皇の皇子である川島皇子が没し、人麻呂は川島皇子の妃である泊瀬部皇女と、皇女の同母兄忍坂部皇子に献呈した挽歌を詠んでいる。ただ、左注によれば川島皇子を越智野に葬った時に、泊瀬部皇女へ献呈したものだという。いずれにしても、この献呈挽歌は、人麻呂が川島皇子の薨後に残された妻である泊瀬部皇女と、皇女の兄の忍坂部皇子へ献呈した挽歌であるという事情を知り得る。

柿本朝臣人麿、泊瀬部皇女忍坂部皇子に献る歌  
一首并短歌

- A 飛鳥の 明日香の河の上つ瀬に 生ふる玉藻は  
下つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく  
寄り 靡合ひし 婦の命の
- B たたなづく 柔膚すらを 劔刀 身に副へ寐ねは  
ぬばたまの 夜床も荒るらむ
- C そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふやと思

ひて 玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉裳はひ  
づち 夕霧に 衣は沾れて 草枕 旅宿かもする  
逢はぬ君ゆゑ(巻一・一九四)

#### 反歌一首

敷栲の袖かへし君玉垂の越野過ぎゆくまたも逢は  
めやも(同一九五)

この挽歌は先の吉備津采女挽歌とは反対に、夫を喪した妻の悲しみに代った哀傷挽歌である。夫に先立たれた悲しみを詠む妻の挽歌には、既に天智、天武挽歌群に見ることができ。しかし、人麻呂のこの献呈挽歌は、天智・天武挽歌の妻側の悲傷とは異なる傾向を示しているように思われる。人麻呂の献呈歌は、明らかに夫に残された妻、即ち「寡婦」の立場、あるいは「寡婦」を主題として作品を構成していると考えられるのであり、死者に対する直接的な歎きを詠むものではない。

人麻呂の献呈挽歌が「寡婦」の立場や、それを主題とすることで詠んだ挽歌であると考えた場合に、そうした挽歌の伝統は存在しないところからも、ここに新たな挽歌が登場したことを意味するであろう。人麻呂献呈挽歌をそのように考えたとき、直ちに思い合わされるのは、中国の哀傷詩賦としてある次のような「寡婦」の詩賦についてであろう。



(イ) 「寡婦賦」(魏武帝)

(ロ) 「寡婦詩」(同右)

(イ) 「寡婦賦」(王粲)

(ニ) 「寡婦賦」(魏丁廙妻)

(ホ) 「寡婦賦」(晉潘岳)

すくなくとも、『芸文類聚』哀傷部に見られるものは、この四賦一詩である。しかも、これらの寡婦を詠んだ詩賦は、(イ)(ロ)の魏の武帝の「寡婦」の詩賦に倣って詠まれた傾向がある。魏武帝の詩賦は、武帝の友人である阮元瑜が早逝し、それで元瑜の妻子の孤寡を傷んで作ったのだと説明している。これと同じ情況にあって詠まれたのが(ホ)の潘岳の「寡婦賦」である。この賦は、潘岳の妻の妹の夫の死に伴って、潘岳はその姨のために代作したものである。(イ)の王粲の作もやはり代作である。これに對し(ニ)の丁廙の妻の作は、自らの夫を喪して詠んだ自作の賦である。

おそらく、魏武帝の「寡婦」の詩賦は、中国では著名な作品であったと思われる。賦の形態で哀傷の文学を詠むこと自体が珍しいことであるが、夫に残された妻の歎きを文学表現の主題に据えることも新しい試みであった。夫に残された妻の悲しみを詠むには、まず魏武帝の「寡婦」の詩賦が原詩としての位置を占めていたことは

十分推測でき、それが後の作品にも影響を与えて行つたのである。

潘岳の「寡婦賦」が人麻呂の泣血哀慟歌に影響を与えたであろうことは別に考えたところであるが、この人麻呂の献呈挽歌は「寡婦」の詩賦の中でも、丁廙の妻の「寡婦賦」との関係が指摘できる。その他の哀傷詩文をも参考としながら、この献呈挽歌を考えて行きたい。

#### A段へ夫に寄せる妻の姿

飛鳥川の上の瀬に生えている玉藻が、下の瀬に靡き流れ触れ合っている。その美しい玉藻の如くあちらへ寄り靡きこちらへ寄り靡き、寄りあった夫とのことがまず冒頭に詠まれる<sup>(5)</sup>。川の玉藻は人麻呂が女性を比喻する方法として主に用いるから、ここでもその玉藻は泊瀬皇女を比喻していると思われる。そして、この玉藻は川の流れにゆらゆらと靡くのだが、その如く妻は夫と共に靡き寄り添ったことを詠む。夫の生前に玉藻の如き妻は夫に期待を寄せ、その夫に身を寄せて夫と共に互いに靡き寄り添ったと言うのである。妻が夫に期待し、夫に身を寄せることが夫婦の姿としてここで捉えられているが、丁廙の妻の「寡婦賦」は、

#### A' 奉君之情塵。如懸蘿之附松。似浮萍之託津。

という。自分は夫の情を受けるが、それは蘿(蔓)が松

の木に身を寄せる如きであり、また浮萍（浮き草）が身を津に託せる如きであるというのである。妻は自分が夫に期待を寄せて夫に寄り添うことを詠むのだが、それを「蘿が松に寄せる」如く、「萍が津に寄せる」如くと、植物を借りて比喻するのは、人麻呂の手法とまったく同じであることを知る。しかも、後者の「浮萍」は水草であり、水草が津に身を寄せる如く、妻は自分の身を夫に寄せると述べるのは、人麻呂が玉藻の靡く如く妻が夫に身を寄せることを詠むのと等しい表現であることに注目される。

#### B 段 夫の死と空聞 V

夫の死後、夫の柔肌を身に添え寝ないので、夜の床も荒れていることだろうという。この場合、「媼の命の」の解釈を通して、死者である夫の君が妻と床を異にして、妻と共寝をしないので「夜床」が荒れているだろうの意とも考えられる。つまり、「夜床」は死者の柩の中であると解釈（武田祐吉氏『全註釈』など）を見るからである。しかし、ここでは皇女に主体を置き、夫婦が夜に共寝をする床であると思われる。人麻呂は泣血哀慟歌でも「吾妹子と二人わが宿し枕づく媼屋の内に」と詠み、「或る本」の短歌でも「玉床の外に向きけり妹が木枕」といい、妻のいない荒れた床や媼屋を残された側の

ものとして詠む。「夜床」が荒れているだろうというのは、夫が死んで夫婦が共に過ごした媼屋（閨房）が空しくなり、夫の居ない寢室を荒れていると言うのである。哀傷詩には、夫のいない閨房を「空室」（潘岳「悼亡賦」）「空館」（同「悼亡詩」）「空床」（王粲「寡婦賦」と呼ぶが、それは荒れた部屋や床を指すものである。丁廙の妻は、

#### B' 還空床以下帷。払衾褥以安寝。

という。妻は空床（荒れた床）へ帰り、帷を下して衾褥（夜具）を払い、いったいどうして寝ることができようかという。夫と生前に過ごした閨房に、夫亡きいま床で寝ることができないのである。人麻呂はこのように男女の共寝の描写を伴って夜床を表現するが、哀傷の詩賦にも男女の共寝の欲びが詠まれるものもある。梁の沈約の「傷美人賦」には「空合歡之芳褥。言歡愛之可永。」と詠む如きである。「合歡」は男女の共寝であり、共寝をした褥（ふとん）が空しくあるというのである。

#### C 段 夫死んだ夫を探し求める妻 V

この段では、妻は自分の心を慰めることができずに、ひょっとしたら夫に逢えるかも知れないと、夫を葬った越智の大野の朝露や夕霧に衣服を沾らして探し求め、逢うことのできない夫のために越智の野に旅寝をしたこと

を詠む。人麻呂は泣血哀慟歌にも死んだ妻を求め山へ登り逢おうとする若い夫の姿を詠んでいるが、この表現が潘岳の「悼亡詩」の「駕言陟東阜。望墳思紆軫。徘徊墟墓間。欲去復不忍。」や、あるいは同「寡婦賦」の「言陟兮山阿。墓門兮肅々。脩壘兮峨々」と詠まれている哀傷詩文を背景としていることは十分考えられよう。丁眞の妻の賦では、

C' 想逝者之有馮。因宵夜之髣髴。痛存没之異路。終窈漠而不至。時荏苒而不留。將遷靈以大行。駕龍輻於門側。設祖祭於前廊。(中略)風蕭々而增勁。寒凜々而弥切。霜悽々而夜降。水濂々而晨結。瞻

靈宇之空虛。

と詠んでいる。死んだ夫がやって来るように思われ、夕方の闇の中にかすかにも現われることを期待するのだが、生と死を隔てていることを思えば、ついに窈然として夫の来ることのないのを知るといふ。時はしだいに過ぎ去り、死者の霊を遙し遠くへ葬るために、柩を載せる車を門の側に用意し、祖祭を前廊に設けることとなる。風は蕭々として強さを増し、寒さはいよいよきびしく、霜はもの悲しく夜に降り、水は静かに流れて夜明けに氷となるといふ、靈屋の空虛な様子を見るばかりであると詠む。

死者(夫)への思いが募り、その靈に逢うことを願いながらも逢うことのできない歎きを詠み、そして死者を葬って、季節の悽愴とした様子を述べるのがこの段である。死者を求める姿は人麻呂の如く直接には表現されていないが、ここから十分に読み取ることができるし、死者に逢えない情態を風が吹き寒さがつづり、霜が降り水の氷る様子で表現するのは、人麻呂が越智の野(葬所)に夫を求める妻の姿を「朝露に玉裳はひづち夕霧に衣は沾れて」と表現することと近いことは言うまでもない。その逢えない結果を、夫の靈屋を見て「空虛」であるといふのだが、これも人麻呂の「草枕旅宿かもする 逢はぬ君ゆゑ」に繋がるものであることは確かであろう。

死者に逢うために、死者を葬った山へと出かけて行くことは先の潘岳の詩賦にあったが、おそらく人麻呂はそうした表現をも参考としていると思われる。その他の哀傷詩文にも露や霜に衣を沾らして死者を求める表現として、魏曹植の「慰子賦」がある。「日晚晚而既没。月代照而舒光。仰列星以至晨。衣霑露而含霜」というように、日は暮れて月が照り、星を眺めて朝を迎え、衣服は夜露に沾れ霜を付けていると詠む。これは幼い児を亡した曹植が、子どもの居た部屋を見るにつけ心が痛み、独り子どもを思いつつ子どもの墓前で一夜を過ごしたとこと

を詠んだものである。

#### 四 飛鳥皇女挽歌と哀傷詩文

泊瀬部皇女献呈挽歌に続いて、文武四年四月に没した明日香皇女の挽歌を見る。この挽歌の題詞によれば、「明日香皇女木廼殯宮之時柿本朝臣人麿作歌一首并短歌」とあり、この作が「殯宮」の時の挽歌であるという。人麻呂の挽歌に「殯宮」の折の作が三首あって、これはその一つである。他の二首は、

日並皇子尊殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌  
(巻二・一六七—一六九)

高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首并短歌  
(同一九九—二〇二)

である。謂わゆる「殯宮挽歌」と呼ばれるこれらの挽歌は、先述の中西進氏の指摘があるように(前掲書)、中国の「誄」によって整えられた、謂わば公性の強い挽歌であると見られる。たしかに、死者の皇統譜や死者の生前の業績の叙述は「誄」の形態を負うことは明らかであり、すでに見た吉備津采女挽歌や泊瀬部皇女献呈挽歌の哀傷性や、あるいは泣血哀慟歌の哀傷性といった、哀傷詩文の流れからは捉えられない異質な側面をもっている。ここに扱う明日香皇女挽歌は、殯宮挽歌であるところから、哀傷詩文のみではなく、他の公性を配慮した表現が予想されよう。

明日香皇女木廼の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作  
る歌一首并短歌

- A 飛鳥の 明日香の河の上つ瀬に 石橋渡しし 下  
つ瀬に 打橋渡す 石橋に 生ひ靡ける 玉藻も  
ぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川  
藻もぞ 枯るればはゆる 何しかも わご王の  
立たせば 玉藻のまころ 臥せば 川藻の如く  
靡かひし 宜しき君が
- B 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや  
C うつそみと 思ひし時 春べは 花折りかざし  
秋立てば 黄葉かざし 敷栲の 袖たづさはり  
鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらし  
み 思ほしし 君と時々 幸して 遊び給ひし  
D 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定め給ひて あ  
ぢさはふ 目言も絶えぬ  
E 然れかも あやに悲しみ ぬえ鳥の 片恋婦 朝  
鳥の 通はず君が 夏草の思ひ萎えて 夕星の  
か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば 慰む  
る 情もあらぬ そこ故に せむすべ知れや  
F 音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く

偲ひ行かむ 名に懸かせる 明日香河 万代ま  
でに 愛しきやし わご王の 形見かこころを(巻  
二・一九六)

短歌二首

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものど  
にかあらまし(同一九七)

明日香川明日だに見むと思へやもわご王の御名忘  
れせぬ(同一九八)

この作は他の二首の殯宮挽歌に比べてみると、哀傷性  
が強く表現される傾向を留めている。対象が女性である  
ことによる相違かも知れない。何よりも冒頭A段の表現  
は、先に見た泊瀬部皇女献呈挽歌に等しいものである。

A段へ夫に寄り靡く皇女↓

奉君子之情塵。如懸蘿之附松。似浮萍之託津。

(魏丁虞妻「寡婦賦」)

この段は、明日香川に生える川藻を比喻として、皇女  
と夫との寄り靡き合う睦まじい姿の描写である。泊瀬部  
皇女挽歌とほぼ等しいが、明日香皇女挽歌がより詳しく  
川藻の情態を描写しているといえる。しかし、いずれに  
してもこの二つの挽歌の冒頭は、発想を同じところに置  
いていることが確かめられよう。

こうした、妻が夫に寄りそう(夫婦が共に寄りそう)こ

とを、自然の景物から捉えるものは、先の泊瀬部皇女挽  
歌で丁虞の妻が、松の木に掛かる蘿(つた)の如く、津  
に寄せる萍(浮き草)の如くだと比喻したのに等しい。あ  
るいは、潘岳の「寡婦賦」にも「願葛藟之蔓延兮。託微  
莖於樛木。」(『文選』)のように、葛藟(つた)の微莖(妻)  
は、その身を樛木(夫)へ寄せるのであるという。ただ、  
人麻呂はここで「藻」の様子を詳述しているように、人  
麻呂は女性を描写するのに「藻」(玉藻)を用いるので  
あるが、これは人麻呂の好みであるのか、あるいは何か  
意味があるのか。例えば『詩経』には「采蘋」の章のあ  
ることは知られている。そこには、

于以采蘋 南澗之浜

于以采藻 于彼行潦

と詠まれている。「蘋」も「藻」も水草の名である。「采  
蘋」「采藻」は、神を祭るために処女たちが渚に出て水  
草を取ることであり、それを詠んだ詩が「采蘋」であ  
る。女性と水草(蘋・藻)との結びつきの一つの例であ  
る。この関係を、さらに『礼記』の昏義によれば、

教以婦徳・婦言・婦容・婦功、教成祭之。牲用魚、  
芼之以蘋藻、所以成婦順也。(国訳漢文大成)

とある。これは婚姻前の女性に婦徳・婦言・婦容・婦功  
の四徳を教え、教え成って女の家の祖に告げる祭りの

折、神に供える犠牲に魚を用い、肉の羹に蘋藻の菜を用いるという。これは「婦順」（女の守るべき道）を成すためだと説明する。先の「菜蘋」の詩と共に、「蘋藻」が「婦順」と結びついている事実は、女性を「藻」に喩えることを容易に導くであろうし、それが婦徳・婦言・婦容・婦功の四徳を意味することも推測し得る。単に女性の美しさ（婦容）のみでなく、藻に喩えることで女性の徳（婦徳）をも指していたと考えることは可能である。「藻」の意味をどのように考えることで、人麻呂が女性を藻に喩えることが理解できるように思われる。

#### B 段へ皇女の死

収華委世。蘭殿長陰椒塗弛衛。（顔延年「宋文皇帝元皇后哀策文」『文選』）痛椒塗之先廊。哀長信之莫臨。（謝玄暉「齊敬皇后哀策文」同）

このB段では、皇女の死を皇女の住んでいた宮に皇女が住まなくなったことから、皇女はその宮を忘れ、そして背かれたのかと歎く。このような表現は哀策文の中に見出され、井上通泰氏は、顔延年の元皇后哀策文を指摘しており、ここでは皇后が死んで世に背き、皇后の宮（蘭殿）は永遠に暗く、皇后の宮（椒塗）の衛りは解かれてしまったと嘆く。小島憲之氏が王仲宣誄や哀永逝文の「忘」を指摘しているのもその一つであろう。また、謝

玄暉の敬皇后哀策文でも、皇后が椒塗（皇后の宮）に居ないことを歎き、皇后の宮（長信）に皇后の出御されないことを哀しむ。いずれも皇后はその宮を忘れられたのか、あるいは背かれたのかと詠む。潘岳の悼亡の詩賦などでは「空室」「空館」と詠み、妻あるいは夫の居ない部屋を指しているが、それは同時に夫婦の共寝の閨房であった。ここでは夫婦の閨房を直接に詠まず、主人の居なくなった宮が「収華」（光暉が消えること）の如く暗くなったことを詠む。人麻呂は日並殯宮挽歌で「ぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」（巻二・一六九）と詠んでいるように、皇子の死を夜の月が雲に隠れる如きであるという。皇女が朝宮や夕宮を忘れ背かれたというのも、光が隠れた如き思いにあることから導かれたものであると考えられる。

#### C へ皇女の生前のこと

爰定厥祥。徽音允穆。光華沼沚。栄曜中谷。敬始絃縱。教先種稷。睿問川流。神襟蘭郁。（謝玄暉「齊敬皇后哀策文」『文選』）  
毓德素里。棲景宸軒。処麗絺綌。出懋蘋蘩。脩詩貢道。称凶照言。翼訓似幄。賛軌堯門。網繆史館。容与経闌。陳風緝藻。臨豢分微。游芸殫数。撫律窮機。躊躇冬愛。招悵秋暉。展如之華。寔邦

之媛。(謝希逸「宋孝武宣貴妃詠」『文選』)

皇女生前のことについて、人麻呂は夫と共に春の花をかざし秋の黄葉をかざして、手を携えて遊行したことをのべる。死者生前のことについては、同じ内容のものを泣血哀慟歌でも「うつせみと 思ひし時に 取り持ちて わが二人見し 走出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く」(巻一・二〇)と詠んで、夫婦の遊び楽しんだ姿を描いている。ただ泣血哀慟歌は、その情景を夫がするように思い期待したことへの比喩として転換されて行くが、ここでは皇女と夫とが袖を交して共に遊んだ姿のみを対象としている。このような死者生前の姿を描くのは、哀傷の詩賦には直接に見出し難い。むしろ、生前のことが大きく描かれるのは詠詞に於いてである。詠詞が死者生前のことを細かく表現するのは、死者の生前に於ける業績や威徳を述べるためである。劉勰は「詠」は「累」であり、其の徳行を累ねてこれを不朽に旌すもの(『文心雕龍』詠碑)であると説明するように、死者生前の徳行などをのべ累ねるのが詠の型式であった。高市皇子殯宮挽歌は殊にその傾向の強く現われている作品であり、日並皇子殯宮挽歌も遠祖(皇統譜)から述べ、皇子が天下を治めたならばこうであった筈だという。皇子は早逝したので、皇子が即位した

皇になった場合の聖天子の姿を架空として想定するが、これも詠詞の型式を踏んでいることは確かであろう。

高市、日並両皇子の殯宮挽歌は、対象が男性であることにより、女性への場合とは自ずから異なると思われる。人麻呂は、むしろ夫と共に遊樂する美しい皇女として明日香皇女を捉え、その姿を皇女の徳行として表現したのではないかと推測する。女性の死を悼む詠詞に見られる婦徳がここではそれに該当するのではないか。

謝希逸の宣貴妃詠は中西進氏の指摘するところであるが(前掲書)、その詠では、宣貴妃の生前について、妃は徳を故郷に養い、天子に召されてから宮中では葛布をきれいに織り(詩経葛覃)、外に出ては蘋蘩を摘んで夫の祭りを助け(詩経召南采蘋)、詩を学んで道を守り、禹の妃や漢の趙婕妤を見習い、六芸に遊び、このような女性は国の第一の妃であるとのべる。宣貴妃の生前に於ける徳行を述べたものだが、その徳行は広い教養のみでなく、婦人としての婦徳を身につけ夫を助け夫に仕えることでもあった。また、謝玄暉の敬皇后哀策文でも、皇后の生前の徳行を夫のために沼や渚に蘩(浮き草)を摘んで(詩経采蘋)夫の祭りを助け、谷中に葛布を織り(詩経葛覃)、天子である夫の冠の紐を作って敬い(列女伝)、稻種を夫にささげて(周礼)妻の務めを示して範とした。そのこと

により皇后の誉れは川の如く流れ、その心は蘭の如く芳  
わしかったという。夫を助ける妻の生前の姿が婦徳とし  
て述べられるように、誄及び哀策文ではそうしたことが  
重要な位置を占める。また一方では女性の生前の容姿を  
述べることもある。潘岳の「皇女誄」では「厥初在鞠。  
王質華繁。玄髮儵曜。蛾眉連娟。清顧橫流。明眸郎鮮。」  
〔全晋文〕と表現するときである。

このようなことから麻呂の明日香皇女生前の描写  
が、夫と共に遊楽する姿として描かれるのは、おそらく  
夫を助けた妻としての婦徳をのべる誄や哀策の死者生前  
に於ける德行に相当するものとして考えることができる  
と思われる。さらに、鏡の如く見あきることのない、満  
月の如くめづらしく思われる容姿の表現も、やはり誄系  
統のものに求められるものである。

#### D 段八皇女の常宮Ⅴ

皇帝痛掖殿之既闋。悼泉途之已宮。(謝希逸「宋孝  
武宣貴妃誄」『文選』) 委蘭房兮繁華。襲窮泉兮朽  
壤。中慕叫兮擗擗。之子降兮宅兆。(潘岳「哀永逝  
文」『文選』)

之子婦窮泉。重壤永幽隔。(同「悼亡詩」『文選』)

皇女が城上の宮を永遠の御殿(常宮)と定めたので、皇  
女を見ることも言葉を交すこともできなくなってしまう

たと嘆く。そうした嘆きを宣貴妃誄では、皇帝が貴妃の  
後宮(掖殿)の静まりかえり、妃の黄泉を以ってそこを宮  
と定めたことを悼むというのである。あるいは哀永逝文  
では、死んだ妻は黄泉へ行き、夫である自分は心に叫び  
胸を打って嘆くのであるが、妻は墓に降ってしまったと  
嘆く。いずれも墓を常宮と定めたというのである。同じ  
く悼亡詩でも、妻は黄泉へ帰り、積み上げた土が自分と  
妻とをはるかに隔ててしまったと詠む。妻が死んで墓に  
葬られることで墓を常宮と定め、夫は妻と逢うことも言  
葉を交すこともできないのである。

#### E 段八夫の悲しみⅤ

悵恍如或存。周違忡驚惕。如彼翰林鳥。雙栖一朝  
隻。如彼遊川魚。比目中路析。(中略)寢興何時忘。  
沈憂日盈積。(潘岳「悼亡詩」『文選』)

皇女が城上の宮を常宮と定めてから、ぬえ鳥の如く片  
恋をする夫、朝鳥の如く城上の宮へ通う夫は、夏の草の  
ように萎え、夕星の如くあちらこちらへと行き来し、大  
船が波に漂う如く落着かないので、それを見るにつけ慰  
める心もないという。夫はまだ妻である皇女の死にあき  
らめきれず妻を恋い続け、墓へ毎朝通い落ちつかなく過  
ごしているのである。それと同じように、妻を亡した潘  
岳は次のように言う。また妻はどこかに生きているよう



にも思い、やはり死んだのだとも思い悲しんでいるが、死んだと思うことはおそろしくある。この妻の死というのは、林に栖む夫婦の鳥が一朝にして一羽になる如くであり、また川に遊ぶ二匹の魚が中途でさかれた如くであるとも思われ、自分の独りとなった姿が悲しく思われる。共に寝起きして来た妻のことはいったい何時になったら忘れられるのか、心の憂いは日毎に積るばかりだ——。人麻呂はこの潘岳と等しく妻の死が信じられず、まだ何処かに生きているであろうことを思い、毎朝のように墓へと通う夫の姿を詠むのである。死者に逢うために墓所へと出かけて行く叙述は、やはり潘岳の「悼亡詩」や「寡婦賦」に見ることがきる。また、ぬえ鳥の如く片恋する夫の描写は「如彼翰林鳥、雙栖一朝隻」の表現に近い。鳥を比喻としているのみでなく、二羽の夫婦の鳥が翌日には妻を失って一羽となり、妻を恋慕うという姿はそれぞれの夫の姿である。そのように悲しみ嘆く姿は「慰むる 情もあらず」ような情態であるし、また「沈憂日盈積」することでもあった。

#### F 段へ形見としての名

追歎功德。述録高行。以為。遠近鮮能及之。重部大掾以時成銘。斯可謂存榮沒哀。死而不朽者已。

〔蔡伯喈「陳太丘碑文」『文選』〕

爰勒茲銘。摛其光耀。嗟爾來世是則是効。(同「郭有道碑文」『文選』)

無絶終古。惟蘭与菊。塗由帝緒。朱軒靡駕。東首塋園。即宮長夜。逝川無待。黄金難化。鍾石徒刊。芳猷永謝。(沈休文「齊故安陸昭王碑文」『文選』)

皇女の夫の悲しみを見るにつけ、なすすべのない人麻呂は、そこで明日香川の明日香を名にもつ皇女の噂や名を絶やすことのないように、天地の如く遠く長く明日香川を形見として偲んで行こうという。死者の噂(生前の德行)や名を永遠のものとするために、明日香川を万代までも形見として偲ぼうとするのは、ごく自然のことであるようだが、ここには直接的な哀傷性を超えた「天地長久」や「万代不変」といった漢文脈として現われる寿詞が背景に存在するように思われる。

およそ、死者の名を「万代」へも伝えようとするのは碑文の思想である。それらは死者生前の德行を伝えようとするものであり、蔡伯喈の「陳太丘碑文」では、死者生前の功德を回想し、その高行を記録し銘を作らせてその德行の朽ちることを願う。同じく「郭有道碑文」でも、銘を刻み德行を記し、後世の者はこの郭有道の德行に見効えという。沈休文の「齊故安陸王碑文」では、昭王の徳が終古まで滅びることなく、世を去った

まその徳行を金石に刻むのだという。永遠に名をとどめるには碑文に適したものはないが、謂わば、死者の名を万代へ残そうとする発想はこのような碑文の思想に基づくものであるかと考えられる。もちろん人麻呂は皇女の徳行を碑文にして刻もうとする訳ではない。明日香川と同じ名をもつ明日香皇女の名を、明日香川を形見として万代までも偲ぼうというのである。

「明日香皇女挽歌は、先の二首の挽歌〔吉備津采女挽歌〕〔泊瀬部皇女献呈挽歌〕の如く、構成や表現に於いて特定の哀傷詩文を取り出すことが出来ない。しかし、基本的な表現として種々の哀傷詩文及び誄、哀策などから人麻呂の表現に近似するものを見出すことができる。殊に死者生前の描写や死者の名を万代までも偲ぼうとするのは、誄詞や碑文の思想に類似する。この挽歌が「殯宮」の折の挽歌であるということによって、哀傷の挽歌を踏まえつつも、誄詞などの方法を取り入れ整えたのであるうと思われる。

## 五 結

人麻呂の作品が持統朝から奈良遷都前の文武朝末に集中している事実は、人麻呂が律令の完成へと向かう時代の、唐制に倣った新しい制度の確立を急務としていた時

代の中にあつたということでもある。共同体的古代性から中国的な官僚制度へと向かう天智・天武・持統の過渡的な社会状況を背負って人麻呂は登場した。かつての宮廷寿歌に対して、人麻呂の個性詩への展開は、何よりも中国の新思想及び漢詩文を享受することに於いて可能であつたと言ふべきであろう。万葉集の各期を代表する歌人たちは、憶良や旅人にする家持にしろはつきりと漢文学への接近の中で新たな表現を可能とした。人麻呂登場の意味は、伝誦歌としてある宮廷歌謡を整備し、まったく新しい人麻呂の創造へと近づけ、あるいは完成させたことであろう。そのような人麻呂の創造性を支えたものが中国文学であつたと考えられ、大化以降の新風の文学の登場であつた。

ここに取上げた三首の人麻呂挽歌も、この人麻呂の中国詩文を背景とした新風の文学であつたと考えられる。それぞれに指摘した中国詩文が、そのまま人麻呂挽歌の原拠であると言ふ訳ではないが、少なくとも人麻呂と中国文学との関係性を前提として人麻呂挽歌を考えたい場合に、既述した如き中国の哀傷詩文、あるいは哀策、誄詞などからその親密性を見出すことができるのである。そのような親密性は、人麻呂がこれらの挽歌を哀傷詩として詠むことを意図することによって可能であつた

と考えるのである。

- 註1 「人麿と海彼」『万葉集の比較文学的研究』
- 2 西岡弘氏「漢魏六朝の挽歌」『中国古代の葬礼と文学』  
例えば西岡弘氏は「人生譬如朝露」(秦嘉「留郡贈婦詩」)「人生幾何譬如朝露」(曹操「短歌行」)「人生如  
一世、去若朝露晞」(曹植「贈白馬王彪詩」)「朝露待  
日晞」(古辞「長歌行」)などの無常感は「雜露」に発  
しているという。「漢魏六朝の挽歌」註2参照
- 3 林古溪氏『万葉集外来文学考』中西進氏「人麿と海  
彼」『万葉集の比較文学的研究』。なお、拙稿「人麻呂  
の挽歌―亡妻の歌をめぐる―」(『大東文化大学紀要』  
二十三号)参照。
- 4 「婦の命の」の「の」を主格とするか接続とするか問  
題があるが、ここでは沢瀉久孝氏の『注釈』による解  
釈を取る。
- 5 この殯宮挽歌の詠まれた時期が問題となるが、渡瀬昌  
忠氏は「殯宮の終り」の頃と推定している。「明日香  
皇女挽歌」『万葉集を学ぶ』第二集
- 6 「人麿と漢文学」『万葉集雑放』
- 7 小島氏は「遊魚失浪、掃鳥忘栖」(「王仲宣誄」)、「鳥  
俛翼兮忘林、魚仰沫兮失瀬」(「哀永逝文」)を掲げて  
いる。「万葉語の解釈と出典の問題」『万葉集大成』3
- 8 『万葉私記』第二部
- 9
- 10 渡瀬昌忠氏「柿本人麻呂の詩の形成」『日本文学』昭  
和33年8月号参照
- 11 中西進氏「柿本人麻呂と時代」『万葉の詩と詩人』参  
照